

青山学院大学文学部フランス文学科主催・シンポジウム

フランス哲学と「科学」の思考

構造主義・数学・医学・エピステモロジー

2011年11月20日（日）14時-17時30分（13時30分開場）

青山学院大学青山キャンパス（渋谷区渋谷4-4-25）

総研ビル（14号館）3F・第10会議室

入場無料・事前申し込み不要

発表概要

●阿部崇（司会・青山学院大学）

《イントロダクション：哲学の思考と科学の思考》

かつてフーコーがフランス哲学について「意識の哲学」と「概念の哲学」という二つの潮流が存在することを指摘したことは知られているが、とりわけその「概念の哲学」は、フランス科学認識論（エピステモロジー）と密接に関係するものであった。その概念の哲学がフランス哲学の歴史においてどのような位置を占めるのか、そしてそれがいかなる思考の可能性を開いてきたのかという点について確認し、「科学の思考」が「哲学の思考」に何を与えるのか、という問題を提起したい。

●田中祐理子（京都大学）

《「非人間的」な身体への思考：フランス医学理論の変遷について》

18世紀末から19世紀末にかけてのフランス医学理論、特に病理学的記述における「人体」の描写に注目して、この時期を通じた医学の科学性の確立と「人間性」との間に生じた距離（すなわち「客観性」の条件）を探る。ビシャ、ベルナル、パストゥールの三者の言説を取り上げつつ、同時に彼らのテキストからカンギレムやフーコーが引き出そうとした近代的人体像についても考察したい。

●前田晃一（東京大学 UTCP 共同研究員）

《ミシェル・フーコーの絵画論におけるエピステモロジーの影響》

ミシェル・フーコーは自身にとっての「エピステモロジー」を論争のなかで定義することを迫られ、それは「方法的」な著作『知の考古学』の執筆の契機の一つともなる。同時にフーコーは「絵画論」や「文学論」を積極的に執筆することをやめる。カンギレムの影響による「エピステモロジー」の確立と「フィクション」についての再検討がこの時期に行われる。本発表では、『言葉と物』におけるベラスケス『侍女たち』論から未完に終わった『マネ論』へと至る「絵画論」の変遷を辿るなかで、フーコーにおける「エピステモロジー」の位置づけについて考察する。

●松岡新一郎（国立音楽大学）

《数学と構造主義：ブルバキの1950年代》

哲学において構造主義の立場から数学、さらに物理学の基礎付けを行おうという試みは、近年様々な立場から活発な議論がなされているが、その中心である圏論をめぐるのは、1950年代に数学者の集団ブルバキの中でも議論があった。圏論を大きく発展させたグロタンディークをメンバーに抱えながら、なぜブルバキは圏論をその数学体系に加えることに躊躇したのか。本発表では、この問いを歴史的に振り返りつつ、より広範な構造主義の問題を考えてみたい。